

医者も知らない 平穏死



連載 38

〈長尾和宏〉長尾クリニック院長。日本尊厳死協会副理事長。著書に『平穏死』10の条件』など。

ていたそうです。

でも、後でN夫さんはこんなふうに言っていました。「少しでも

N夫さん(42)のお母さんに胃がんが見つかったのは3年前。その時は手術でがんを取りきれたのですが、昨年、骨への転移が見つかりました。

「最初は自分で病院に通っていたのに、数週間後には体のあちこちが痛くなりほとんど寝たきり状態になってしまった。通っていた大

在宅介護が不安だったが…

度はゼロに近かった」
N夫さんは、お母さんを別の病院に転院させようと思ったのですが、この病院がいいのか、など悩んでいるうちに、お母さんの痛みの様子は一層ひどくなりました。そして、担当医から「もう、あと一カ月くらい」という宣告が…

焦っていたN夫さんに、自宅での看取りを勧め、私を紹介したのは、近所に住む親友で



した。N夫さんはすでに父親を亡くし、離婚もしているの、自宅での介護となると、負担はすべて自分にかかってくる。でも、

「今までの担当医のものには置いておきたくない」という強い気持ちから、お母さんを家に連れて帰りまして。

それから約2カ月後にお母さんは旅立ちました。痛みは苦しんでいた入院中とは違い、穏やかな毎日。麻薬がうまく効き、痛みもまったくなかった。

息を引き取る3日前まで、自分の手でおかゆを食べ、好きな「黄さでした。」

私の本心からの言葉を(写真はイメージ)